

∴ 角 川 文 庫 ∴

阿 部 次 郎

三太郎の日記 補遺

北住敏夫解説

ἀπὸ κρήνης καθαρᾶς
ἐκρεῖ ὕδωρ καθαρὸν

昭和二十五年十一月十日 初版發行
昭和三十六年七月十日 十版發行

三太郎の日記 補遺

定價 二百六拾圓

著者 阿部 次郎

發行者 角川 源義

印刷者 橋本健四郎 東京都千代田區神田神保町一ノ三三

發行所 株式會社 角川書店 東京都千代田區富士見町二ノ七
振替口座東京一九五三〇八

落丁・亂丁本はお取替へ致します

Printed in Japan

同興印刷・筆本製本

三太郎の日記補遺

阿 部 次 郎
北住敏夫解説

角 川 文 庫

1005

目次

自序

彷徨

驚嘆と思慕	七
自然主義論争二篇	二〇
『それから』を読む	二六
二葉亭全集創作の卷	三八
實驗と經驗	四四
個性と新	四八
書くと書かざると	五〇
通俗と難解	五五
木つつき	五八
第三回自由劇場雜感	六〇
井上正夫の馬泥棒	六六
將に老いむとするか	七〇
情感的學風を論ず	七五

眞美の愛慕

健全なる思想とは何ぞや

現代青年の悲哀

春は來ぬ

イブセンの『建築師ソルネス』

夜の歌（ニイチエ）

三太郎の日記 第一補遺

一 描寫の題材と描寫の態度

二 内生活直寫の文學

三 内生活直寫の文學（再び）

四 文壇の社會問題

五 作家と批評家

六 作家と批評家（重ねて）

七 出鱈目

三太郎の日記 第二補遺

社會と思想

一 思想對社會の問題

思想文藝取締りの論理

六

七

八

九

一〇

一一

一二

一三

一四

一五

一六

一七

一八

一九

二〇

二一

二二

二三

二四

二五

禁止と訓誠

無恥なる説教者

二 發賣禁止に就いて

三 女性の覺醒に就いて（談話の代りに）

思想と文章

一 オイケンの翻譯

二 思想表現の文章

三 再び思想表現の文章（I氏に）

印象と批評

一 『自敘傳』の世界

二 『自敘傳』評補遺

三 『小鳥の巢』の印象

四 芝居を見る眼

五 吉右衛門の文覺

六 愚劣なる帝國劇場

七 芝居のこと

八 『タンタジールの死』と『道成寺』

九 土曜劇場

十 菊五郎と吉右衛門との前途

十一 歌舞伎座の『道明寺』と『生玉心中』

一七一

一七一

一七三

一八一

一八七

一八八

一九三

一九八

二〇五

二〇六

二二三

二二八

二二三

二二七

二三一

二三五

二四三

二四七

二五〇

二五七

新纂

藝術上の眞に就きて

象徴主義の話

詩の批評に就いて

赤彦・茂吉・蕨吉

歌集『切火』に就いて

『氷魚』に就いて

『赤光』を讀みて

『あらたま』に就いて

『林泉集』を讀みて

『しがらみ』所感

西詩餘響

ゲーテ詩鈔

希臘詞華集鈔

解説

北住敏夫

二七

二九

三〇

三二

三三

三五

三六

三八

四〇

四二

四三

四五

四七

自序

合本三太郎の日記を世に送るとき「今日以後三太郎の日記の唯一なる形としてこの書のみを残す」決心であることとを、私は序文の中に書いた。それは第一と第二とに附載した雑稿を永久に抛棄するといふ意味をも當然に含んである筈のものである。然るに私は今この誓言を自ら破つて、これ等のものを再び復活する希望に應ぜむとしつつある。従つて此のやうな處置をとるに至つた由來を告げる義務を自ら負はざるを得ないのである。

「三太郎の日記」はその根本動機に於いて日記に濫觴する。私は私の胸に蟠るものを吐き出すためにあの中の大部分を書いた。新聞や雑誌の要求に應じて原稿を作製するときにも、私は日記的感興を原稿紙に托するか、時としては實際の日記から抄出してその需に應じた。而もその内容があつたやうな幼い、恥かしいものであるとき、私が一篇毎に躊躇しつゝ公表を決心しなければならなかつた心理は、今でも同情ある人々には察して貰へるであらう。私はかくて彼等を産み捨てたのみで、産みおとされる子の壽命と健康とについて何の見通しも豫想もなしに、ただ腹にたまふものがあるに従つて世間に吐き出して來たのである。それが次第に溜つて一冊の書をなすに足るほどの分量となるに至つても、私は自分で進んでこれを本にすることを考へず、書肆が來てこれを希望するに及んで、始めて「その志に任せる」氣になつたのである。それが長命であらうとは固より豫期しなかつた。併しそれが短命であらうと覺悟したわけでも亦なかつた。さういふ見當をつける興味は殆んど持合せずに、ただ人が出したいといふから出し、一冊分の分量が溜つたから出す氣になり、而もさうするのが自分のためにも便利だから出して置いたに過ぎない。さうして一冊として出版するとなれば、日記的性質の本文以外、折に觸れて書いたもの——當時は批評とか評論とか呼ばれてゐたもの——も附載する方が文集として保存するに自分の便宜が多いから、それも亦日記の一角に占據させた。かくておのづから日記の本文と附録雜稿と、二つの區劃が出来上ることになつたのである。この

二區劃中、合本にするときに、私は日記の本文だけを集めて雜稿を捨てる方針をとつた。その結果捨てられた部分が久しく日の眼を見ぬ成行になつたのである。

然るに「三太郎の日記」は、常人の豫想——といふものがあつたとすればその豫想——を超えて長生した。それは私の三十歳前後に出生して、七十に垂んとする老齡まで衰老に伴ふといふ運命を荷はされる廻り合せになつてしまつた。私は今この運命について誇つたり呟いたりする氣はない。ただ虔しくこれを享けて、信順にその意志を成さうと心掛けるばかりである。あの恥かしい本も、何かの役に立つ限りは、何時までもお役に立ちたい。廻り果てた時勢に育つた今日の青年にも、凡そ四十年前の生活記録が猶多少の參考になるならば參考にして貰ひたい。——私はひたすらにかう祈念する。

併しこの意外の長生に作つて、今一つの思ひがけぬ現象が起つた。それは、極めて少數ながら、阿部次郎研究の一羣が發生して來たことである。これ等の人々は私を研究對象として私の生成と展開と思想とを追窮して見たいといふ。さうしてそのためには材料がまだ缺乏してゐる、特に「三太郎の日記」で附録の部分が捨てられて容易に入手し難いのが自分達には甚だ不便である。何とかしてあれを昔に返した形で出版してくれまいか。——諸君はかういふ要求を私に提出する。さうしてこの要求が「三太郎の日記 補遺」を出すきっかけを作つたのである。

志ある人々のために「合本三太郎の日記」の廉價版を出して置きたい——これは私自身が久しく願つてゐたところである。偶々角川書店の請求に應じてあの書の文庫版を出すことになつたとき、私はこの際、嘗て除いたものをも亦復活させて、篤志者の要求に應ずることを思ひついた。書肆も亦この案に異存がなかつた。併し愈々印刷に着手して見ると、合本のみでも既に相應の頁數に達する上に、嘗て捨てた部分が又可なりの分量に上つて、これを強ひて一冊にするのは、讀者のためにも却つて不便となることを恐れなければならなかつた。それに舊版の所有者が附録のみを必要とするとき、新に文庫版として全體を購ふのは、無用の浪費ともなるであらう。今日の如き窮迫した經濟狀態にあつて、篤志者に二重の出費を強ひるのは甚だ心無き業である。寧ろ『合本』と『補遺』と二冊に

わけて出すのが讀者に親切な所以ではなからうか。書肆も私もかう考へ直した。さうして先づ『合本』の方を世間へ送つた。

ところが『補遺』を別冊にすることに決定するに及んで、又ぞろ意外の要求が追加されて來た（『三太郎の日記』の運命については意外のことが續發する、私はこれに對してただハイハイと微笑して服従するのみである）。その追加要求は三項目である。一、諸友との合著『影と聲』の中、私に屬する部分をもその前に附けて貰ひたい。二、あの時分に書いて、初から『三太郎の日記』に收められてゐないものも亦残つてゐるやうに思ふ。それも此際集めて置いて貰ひたい。三、序でにアララギに譯載した『ゲーテ詩鈔』『希臘詞華集鈔』も附録してほしい。私はこの三箇條の要求に對してそれぞれに多少の抵抗を見せながら、結局諸君の意志に従ふより外なかつた。こんなにして又三百餘頁の『三太郎の日記 補遺』が出来上つたのである。

かくて結局本書は五つの部分から出来上ることになつた。第一部は「彷徨」である。森田直平、安倍能成、小宮豊隆等、當時の「朝日文藝」に據つてゐた三友との最初の合著『影と聲』のうち、私の領分に屬するものの全體である。併し此處に集められたものは、朝日文藝に書いたもののみではない。其處には、もつと古く、大學生として「帝國文學」の雑誌に書いたものも亦相應の分量を占めてゐる。それはその文體によつて——文章體と名づけられる前世紀的文體によつて——一目瞭然として見わけられるであらう。私は、それにつけても、亡友小山内薫君に冷められた或日の話を想起する。何かの序でに、小山内君は今になつて文章體の文章などを書く者は書行燈だねと言つた。私はそれが自分にあてつけられてゐることは十分承知してゐながら、それでも自分の書き癖が自然に口語體に移つて行つてくれないので、學生時代は高山樗牛を宗とする文語體で一貫した。それが如何に退屈な、滑稽なものであるかは、諸君がこの書で眼のあたり見られるであらう。一體に移行の緩慢は、私の生涯を通じての一つの特徴である。私の書行燈に顧慮することなく、日本の新しい口語體の文章の曙は、その自在な清新を以て既にあけ渡

つてゐた。漱石の『吾輩は猫である』や、藤村の『破戒』などはもう書かれてゐた。さうして私のやうな少年の文章體を最後の殘骸として、日本の文章は、一般的現象としても、新しき時代に蟬脱して來たのである。

第二部は「補遺 第一」である。これは最初の『三太郎の日記』に附載されたもので、讀賣新聞社の客員として同紙の日曜附録に書いたものを主内容とする。人は此處に、彼自身の所謂個人的興味に籠りつつ、社會的關心にも亦無頓着なるを得ざる者、社會的興味に渡らむとして摸索しつつある青年を發見するであらう。

第三部は「補遺 第二」で、『三太郎の日記 第貳』に附録された部分である。それは更に「社會と思想」、「思想と文章」、「印象と批評」の三小部分にわかれたる。それは社會的關心の漸進と周圍の文化現象との交渉の親密を加へて來た痕跡を示してゐる。私の生活はこれによつて多少の賑やかさを添へてゐるが、それだけに又漫談的要素の混入も亦眼立たざるを得ない。就中私の芝居道楽の亢進がこれを煽つたのである。併し一方青年の Dislike (伸張) 的傾向も熱度を加へた。狭める力としての社會に挑戦する意志が漸く眞實にならむとする。ただ公共的秩序を遵奉する態度は常に嚴守して踏み越すことがなかつた。私は秩序の埒内にあつて秩序の革新を主張することを原則とした。これは老年に到つて *Dislike* (嫌惡) を主とする生活態度に轉移しても依然として變らぬつもりである。臺を伸せ、幹を固めよ。その役割に分擔はあつても、若い者も老人も、この二つの作用において協同すべきである。生命に對する敬虔はこの兩作用の相互尊重を命ずる。この三小節の中「思想と文章」については一つの回想がある。安倍龍成のオイケン『大思想家の人生觀』の翻譯が出たとき、私はこれを批評する役割を引受けて「オイケンの翻譯」を讀賣新聞に書いた。私は仲間裏をすることが特別に嫌ひな性質として、思ふままに無遠慮にこれを是非した。さうして原稿を送つたあとで、少し龍成に氣の毒なことをしたと思つてゐた。ところがその新聞が丁度龍成の結婚披露式の朝に出るといふ廻合せになつてしまつたのである。來客の間に今朝の新聞の話が出たとき、私は「生憎な日に出て、君の氣分を損ひはしないかと心配してゐたよ」と心から彼に挨拶した。すると「今朝あの新聞を懷にして便所に行つたとき、不圖おとしてしまつて、まだ讀んでゐないんだよ」と龍成は答へた。かういふわけで危

く能成の新婚の喜びを妨げずにすんで、私はまづよかつたと思つた。ところが岩野泡鳴氏が私に對する駁論を書いて、結局能成にもとばかりを浴せるやうな結果を來したのである。泡鳴氏は私の批評を八百長と見てしまつたらしい。それが八百長と見られるかどうかは、讀者の鑒別を請ひたいところである。

以上で舊刊『三太郎の日記』の復活は完成する。残るところは第二附録の歐文抄録のみであるが、それは別に改造社版の『學藝論抄』に悉く轉載してある。改めて此處に附するまでもないであらう。

第四部は「新纂」と名づける。これは私の殆んど闕知せぬ部分である。アララギの研究者北佳敏夫君が、齋藤茂吉君の作品を探索する序でに、私の同誌に寄せた短文をも大抵集めてゐた。それに角川源義君が更に集め足してこの部分の原稿を作製してくれた。それが主としてアララギに出たものに限られてゐるのは、さういふ因縁によるのである。此處に集まつてゐるのは、友人にあてた禮状や、談話代りのつもりで書いた小文ばかりである。恐らく讀者にとつては何の參考にもならないであらう。併し私には友達の記念として流石に懐しいものである。赤彦齋吉兩君が鬼籍に入つてから、知らぬ間に久しい歳月を経た。私は残つてゐる茂吉君の加餐靜養と長壽とを祈るの情に堪へない。

かくて最後の「西詩餘響」が来る。これもすべて、昔アララギに寄稿したものばかりであるが、私は最もこの部分を出し滯つた。それは意に滿たぬといふばかりではなく、老後の道樂の一部として、閑と氣分とに任せてゲーテの詩をこれからもポツポツ譯して見たいといふ心が、私には今でも猶残つてゐるからである。幾篇出来るかは固よりわからない。併し從來譯したものも譯し直して、氣に入つたものだけを集めて、出版するならばそれだけを出版したい。「寫聲機にも劣れるわが貧しき言葉」の譯なんか出したつて仕やうがないぢやないか。私はかう思つて仲承知しなかつた。併し口説上手の角川君は遂にその堅壘をも攻め落した。君によれば、それは『三太郎の日記』の一部分なのだからである。それを翻譯とすれば色々不満もあらう。併し若き日の譯者自身の抒情詩と見れば、何も巧拙に拘泥するには及ぶまい。自分の出して貰ひたいのは若い著者の抒情詩である——大凡かういふ理由で結局

私を口説きおとしたのである。従つて讀者はこの拙譯の責任を全然原作者ゲーテに負はせぬやうにして藏きたい。ゲーテはただこの「寫辭機」にも劣れる貧しき言葉の持主にモテーフを貸しただけである。この知照寫辭機は、更に角自分の手におへさうなモテーフを手あたり次第に借用しただけである。それでも猶青春の詩といふものであらうか。角川君に同感する寛大な人々は同君に同感して下さい。恐らく同君のこの歳のよい豫期は見事に外れるであらう。

併し私は結局これをも卷尾に附載することを承知した。既に承知したとなれば、私は三箇條のことを附けて置く義務があると思ふ。

第一に私は、アララギに載せた譯詩中、「新しき戀、新しき生」を削除する。あれは、あの當時、批評家三井甲之君の十字砲火を浴びたものであるが、今これを讀みかへして見ると、如何にも拙い。仲間他の詩に較べて見ても、私自身にさへも如何にも拙く思はれる。故に私はこれを除き去つて批評家三井君に敬意を表する。

第二に私は『ザイルヘルム・マイスター・徒弟時代』中の詩を非常に感歎してゐるものである。此小説の邦譯を見る毎に、私は先づこれ等の詩の譯を讀んで、いつでもそれが面白く行つてゐないのに不足を言つて來た。それが友達なら直接に譯者自身に私の不滿を告げた。未知の人なら、私は心ひそかにその譯者の力量を篇中詩の譯によつて忖度した。ところが角川君の集めてくれた「ゲーテ詩鈔」を見ると、驚いたことには、ミニオンの詩や盛樂彈の詩を大部分、私自身臆面もなく譯してゐるのである。私は今更ながら他の譯詩を是非したことを恥じた。君達も拙いが僕も拙い。お互に日本語をもつとどうにかするやうに勉強しませう。私は「同罪者」にかう呼びかけたいと思ふ。

第三に、譯詩も時期によつて色々違つて來ることを例證するために *Wanderers Noctuid* (すすらひ人の夜の歌) の第二譯を特に「ゲーテ詩鈔」の最後に附載する。それが第一譯とどんなに變つて來たかを見て貰ひたいのである。第三譯第四譯と重ねて行けば、それは多少づつはよくなつて行くであらう。併し此處に集められたものは、寫辭機にも劣れる者の口真似の第一譯である。私は本書の出版に當つては、舊稿に象徴程度の訂正を施すことのみを

以て満足しなければならなかつた。それに「希臘詞華集抄」は直接の原語譯ではない。それは Andrew Lang 編 “Greek Anthology” からの重譯に過ぎない——私はこの弱點をも亦告白して置かねばならぬ。

以上、私は本書成立の由來について、大略の事を讀者に告げ得たと思ふ。言葉は逆説めいて響くにもせよ、私がこの補遺を出版する決心をしたのは、偏に少數特殊の研究者のためである。蝶の研究者はその幼蟲の標本をも亦必要とするであらう。私は彼等に一つの毛蟲の標本を提供するのである。それが一般の讀者に何の裨補するところあるか。その裨益の有無については、私自身これを疑ふ。讀者よ、注意に價せぬところは、ずんずん飛ばして讀んで行つて下さい。大學生の作文の如きに至つては特にさうである。

昭和廿五年十月五日雨夜

仙臺 阿部 次郎

彷徨